くじらのいびき

田宮ヨシノリ

登場人物
女1　片山ユリ
男1　龍池ワタル
女2　向島カヨ
男2　やまもと
女3　妹

第1場

ある初夏の昼。
一応海の近くにある、といえなくもないアパートの一室。部屋の隅にはシングルベッドが置かれている。それ以外に家具らしき、家具は見当たらない。廊下へ続く扉が一つ。また、大きな窓があって、そこからベランダに出られる。このでかい窓ははたして窓なのだろうか。と昔から思っていた。というのは、窓と呼ぶにはでかい。どちらかというとベランダへ出る扉、がたまたまガラス製だったというだけな気がする。調べた。掃き出し窓というらしい。窓だ。
部屋の中には洗濯物が干してある。多種多様な洗濯物。女物の衣類が多いように見受けられる。
そんな中、男2が脚立に乗って、エアコンを覗き込んだり、カバーを外して中身を触ったりしている。そういった類の業者さんの格好にも見えるが、それが男の私服のようにも見える。
よく見ると、部屋の隅のベッドの上にも人がいる、女1だ。部屋着姿の女1、左足に包帯を巻いている。

男2　……だから、言ってやったわけ、それうまくいってないよって。だってさ、押すなよ押すなよって言ってて押すからいいわけじゃん。それでさ、押すなよっ言ってる彼が本気で嫌だなってなるからいいわけじゃん。海に落とされて、ああ、海って一回入ったら塩とか結構着くよね。シャワー入っても簡単には取れないんだよねあれ。しかも、髪の毛パサパサになるよねって。ほんと、もう、信じらんない！みたいなことをさ、その一瞬、押されて落ちるまでの一瞬に考えるからいいわけじゃん。なのにさ、あ、落ちる。俺、落ちる、落ちる、うわー！夏じゃん最高じゃん！夏！海！花火！最高！みたいな。みんな、押してくれてありがとう！そうだよね、俺らってそうだもんね。

押すなよ押すなよ言ってる時こそ押せっていう。俺らじゃん、みたいな。恍惚と、恍惚とした顔でさ、恍惚な恍惚でさ、落ちてったら、それはもうおじさん見てらんないよっていうか

女1　おじさん？

男2　あ、俺ね

女1　おじさんか？

男2　おじさんだろ

女1　えー

男2　でさ、見てらんないよーってなりつつも、なりつつもよ、やっぱり見ちゃうのよ。そのなんだろう、光？におい？青春のにおい？スメル？ティーンの青春スメルにあてられちゃうんだよね、結局。なんなんだろうね。どうしてあんなにまぶしいのか。若いからかな

女1　若いって、そんな変わんないでしょ

男2　まあ、そうだけど、そうなんだけど。なんていうの、あれあるじゃん体年齢

女1　体年齢？

男2　体の年齢

女1　が、なによ

男2　その体の年齢とさ、実年齢って違うわけじゃん

女1　違うの？

男2　まあ、違ったりするじゃん

女1　へー

男2　知らない？体重計でさ。そういうの教えてくれるやつ

女1　年齢を？

男2　体年齢ね

女1　かしこいね

男2　でさ、それってやっぱり変わってくるのよ。自分の実年齢とその体の年齢って

女1　どっちに？

男2　なに、どっちって

女1　若い方に？それとも、老いてる方に？

男2　え、それは、日による

女1　え、日によるの？年齢なのに？

男2　日によるよ、食べすぎた日は老いるし、なんかうんちとかちゃんと出た日は若くなるよ

女1　なにそれバカみたい

男2　俺もそう思う

女1　やまもとってそんなの使ってんのね

男2　当たったのよ、エディオンの抽選のやつで。お米か体重計

女1　体重計ね
男2　ちょっと痩せた
女1　え
男2　毎日さ、体重計乗って。今日は年取ったとか今日は若返ったとかやってるから、揚げ物とか食べんのとかも、なんか抵抗が出てくるっつうか
女1　そんなん気にしてんの。っていうか毎日体重計乗ってんの？
男2　やばいかな
女1　やばいっていうか、やまもとっぽくないね
男2　やっぱり
女1　やまもとは体重計とお米なら、まっすぐお米を選んで、いっぱいあるからっていって、一か月分を二週間くらいで食べちゃうって感じ
男2　やっぱり。そうよね、そうなんだよね
女1　やっぱりって
男2　わかるのよ、なんか自分らしくないよねって。毎日体重計乗ってさ、ピピって言われて、今日の年齢とか言われんの。かしこいんだかなんだか知らないけど、それが毎日違ってるわけよ。おかしいな、もう俺おじさんなのになとか思いながらまた若返ったなとか思ってさ。若返ったって言われたら、その時点で自分の実年齢を自覚しちゃうというかさ
女1　自分のことおじさんおじさん言っちゃうわけ
男2　おじさんおじさん言っちゃうわけよ、自覚したいわけよおじさんを
女1　でも、若いわけじゃん実際
男2　実際はね
女1　じゃあさ、別にさ、目の前で押すなよ押すなよとか青春やられても、別にいいわけでしょ
男2　だから……そう、実年齢と体年齢がずれるように、実年齢と心年齢がずれてくるわけ
女1　心
男2　心年齢
女1　心の年齢ね
男2　だから、実際にはその彼らと俺がそんなに年齢として変わらなかったとしても、それは、実年齢であって、俺のその日の心年齢はもっとうんと高かったわけ。だから、海辺でさ、太陽の光を燦燦に浴びながらさ恍惚かつ恍惚な表情でさ、押すなよ押すなよやられると厳しいことになるわけじゃん
女1　……何してたの？
男2　え？
女1　海辺で
男2　ゴミ拾い

女1　ええ？
男2　……あそこの近所に、竹内さんっていうおばあちゃんが住んでんのよ
女1　うん
男2　で、そのおばあちゃん去年まで海辺の掃除をやってたわけ。夕方毎日
女1　ボランティア？
男2　いや、ボランティアっていうか……ボランティアってわけじゃなくて。それは、なんかもう、一周回って自己満足みたいな感じで
女1　何それ
男2　おばあちゃん、もう、うん十年ゴミ拾いしててさ。最初は、単純に汚かったからとか、まあそういう理由だと思うんだけど。うん十年ほぼほぼ毎日やってたらさ、もうボランティアとか自己満足とかそういうことじゃなくてさ、習慣……あるべきこと？みたいな。この世界にあるべきことになったわけ、おばあちゃんが毎日夕方ゴミ拾いするっていうことがさ。でも、二月前くらいに膝壊しちゃってさ。一人で外出たりするのちょっと難しいみたいな感じになって……最初はまあ、やっとやめれるみたいな
女1　え、やめたがってたの？
男2　よくわかんないけど、まあ休めるぐらいには思ったんじゃない？でも、一週間もしたらさ、そわそわそわそわしてくるわけ、自分が掃除をしないから、ゴミが溜まってるんじゃないか？って。でも、実際にはゴミなんかほとんど落ちてないわけよ。ゴミなんか落ちてないんだけど、何かをしなければならないと思っちゃうのよ。自分という人間がその毎日ゴミが拾われているという世界からなくなってしまうことに抵抗があるわけ。死ぬわけじゃあるめえしね、不思議
女1　それで、海に行ってたわけね
男2　え、別にいいじゃん、普通に海行っても
女1　別にいいけどさ。海に行く動機がさ、わかんなくて
男2　わかるだろ、人間誰しも常に海いきたいだろ
女1　そんなことないよ。だって、海だよ。海。海って海があるだけで、他に何もないでしょ。海しかないでしょ。海でできることって何よ。ベタベタするし、日焼けするし
男2　帰ってくる人はね
女1　……。
男2　死ににに行くには最高な場所だよ
女1　……おばあさんの代わりに、海行ってたわけでしょ
男2　そう
女1　ゴミ拾ったの？
男2　だから、落ちてないんだってゴミなんて
女1　それで、若者を眺めていたわけね

男2　すんごい楽しそうでさ……心の年齢が俺はどんどん老いてきてるなやばいなって思って、必要だなって思ったよね
女1　なにが
男2　心のダイエット
女1　ダイエット？
男2　ダイエットっていうか、健康になるための、心の若返り
女1　若返りね
男2　体年齢がさ、毎日変わるのであれば、心をなんかしたらなんか若くなって、青春のさ、若いティーンなスピリットがさ、でんでかでんでかしてくるんじゃないかなって

女1、ベッドから立ち上がり、

女1　直りそう？
男2　（エアコンの方を見て）いやー、すぐには直らないかな
女1　えー
男2　まあ、部品をちょっとあれしたら
女1　困るよ
男2　困るか？
女1　困るでしょ
男2　そう？
女1　夏だよ
男2　まあね
女1　籠ってるから
男2　何？
女1　私、籠ってるから
男2　何それ
女1　暑いのにさ、ポタポタポタポタ水垂れてくるし
男2　でも、一応涼しいでしょ
女1　涼しいけど、困るでしょ
男2　まあね
女1　朝起きて。まあ朝は涼しいから、ちょっとの間は我慢しようかなるけど、だんだん暑くなってきて。しょうがないから、エアコンつけるかとか思ってつけたらさ、あれなんか湿っぽいみたいな。涼しいけどなんだろみたいな。そしたらもう水がぽたぽただよ。なに、マイナスイオンとかそういう機能ですかこれは
男2　この部屋なんか森の奥に滝見に行った時の感じするもんね
女1　でしょ

男2　俺は好きだけどな
女1　好きとか嫌いとかじゃないでしょ。洗濯物とか干せないでしょ
男2　外に干したらいいじゃない、夏だし。暑いから、すぐ乾くよ
女1　雨降るでしょ、虫つくでしょ
男2　はい？
女1　雨降るし、虫つくの
男2　雨降るし、虫つくかな？
女1　一番嫌い
男2　雨が
女1　雨は別にいいよ
男2　いいのかよ
女1　よくないよ
男2　どっちよ
女1　外干ししてて、やっと乾いてきている洗濯物が、雨に降られるのが一番嫌い
男2　それは嫌だね
女1　二番目は虫ついてるのに気付かず部屋の中に入れちゃうパターン。そもそも外に干すときに窓開けなきゃいけなくなるし
男2　外干しだからね
女1　せっかく冷えてる室内なのに。開けて、あっちーって……まあその瞬間は気持ちいいんだけど
男2　わかる、それ。エアコンの効いた室内から体半分出た時ね
女1　ね
男2　ちょっと気持ちいいよね

女1、ベランダへ続く窓を開け、ベランダに出る。生暖かい微風が入ってきて、薄いカーテンと洗濯物がゆらゆら揺れる。

男2　歩けるの？
女1　え
男2　ほら、それ

男2、女1の足の包帯を指す

女1　……まあね
男2　何それ
女1　限りなく骨折に近い突き指
男2　え、骨折じゃないの？

女1　折れてはない
男2　でも近いんだ
女1　痛さは骨折を超えてるね
男2　折れてないんでしょ
女1　折れてない
男2　突き指ね……
女1　なに
男2　足の突き指ってある？
女1　そうね
男2　足でしょ
女1　私も、びっくりした
男2　なんか、ちょっと痩せた？
女1　え
男2　いや、わかんないけど
女1　そうかも……若返ったかも
男2　痩せすぎたら、若くならないんじゃない
女1　え、そうなの？
男2　知らない、痩せすぎた状態で体重計なんか乗ったことないもん
女1　おばあちゃんとか痩せてるもんね
男2　人によるんじゃないかな
女1　そのおばあちゃんは？
男2　ゴミ拾いの？
女1　うん
男2　めちゃくちゃ痩せてる
女1　あ、そう
男2　ゴミ拾いがいい運動だったんだよ多分。筋肉とか落とさないための
女1　そうかもね

と、突然、男1が扉から入ってくる。なんか小綺麗な格好。

男1　（男2を見て）え

男1のその声に男2も目をやる。視線がぶつかる。生暖かい風は窓から入り込んだままだ。

女1　あ、来たんだ
男1　え、誰

男2　あ、やまもとです
男1　え
女1　やまもとです
男1　え、名前？
男2　名前っていうか、みよじ？
女1　みょうじ？
男1　え、やまもと。あ、ですね、苗字です。はい。
男2　うっす
男1　で、誰
男2　やまもとっす
女1　やまもとっす
男1　うん
男2　あ、エアコンをね
女1　あ、そうエアコンを直してもらおうと思って
男1　あ、エアコンの
女1　そう、壊れてたでしょ
男1　あ、水が
男2　水がポタポタ
男1　直りそうですか？
男2　いやー、今日はまだ
男1　まだ？
男2　まだですね
男1　まだ？
女1　部品がいるんだって
男2　はい
男1　あ、そういうことね
男2　はい
女1　今日来るって言ってたっけ？
男1　言ってはなかったけど、ダメですか？
女1　別にダメじゃないけど……（男2に）ね
男2　うん？

女1、ベランダから部屋に戻り、窓を閉める。

女1　（男2に）ね
男2　……まあ、はい
男1　え、すいません、やまもとさん

男2　はい、やまもとです
男1　あ、やまもとさん
男2　はい、やまもとです
男1　えーっと
男2　はい
男1　やまもとさんは、あれですか電気会社の人ですか？
男2　電気会社？
男1　電気会社
男2　電気会社って……ほにゃらら電力的なことですかね？
男1　あ、違くて、そうじゃなくて
男2　ですよね、電気会社って聞いたことなかったから
女1　ありそうで、なさそう
男1　じゃなくて。その、電化製品を、つまりエアコンとかを直すとかそういう類の、あの、なんていうんですか
男2　業者
男1　業者の人なんですか？
男2　いや、違いますね
男1　え
男2　違います
男1　え、違うんですか。違うのに、エアコンいじってるんですか
男2　いじってるんですか？まあ、いじってますけど
男1　（女2に）え、まじで、どういうこと
女2　……（男2に）ね
男2　は？
男1　は？
女1　ね
男2　……。
男1　……。
女1　ね
男2　え、何が？

女1、男2が乗っている脚立を蹴飛ばす。実際には、蹴ってみたところで飛びはしないが、脚立に乗っている人間にとって、飛ぶ飛ばないは関係ない。あぶない。

男2　うわ、ばか。ばかやめろ
女1　うるせー！

男2　押すな！っていうか蹴るな！ばか
女1　空気読めよ！エアコン直せよ！
男2　押すときは、絶対って言った後なんだよ！
女1　エアコン直せよ！
男2　直すよ、直すけど、部品が、（男1に）おい、こいつなんだよ
男1　……。
男2　なんだよこいつまじで
男1　お前誰だよ
男2　はい？

男1も脚立を蹴りにいく。

男2　うわ！絶対押すなよ！
男1　お前誰だよ！
男2　やまもとだよ！
男1　だから、誰だよ！
男2　お前が誰だよ！
男1　彼氏ですけど！
男2　どうぇい（感嘆詞）
女1　何言ってんの？
男1　めっちゃ彼氏なんですけど！
男2　ですよね、ですよね！
女1　うるさい！

女1の声が一番でかいのだ。
三人止まる。女1と男1は脚立を挟んで睨み合っている。

女1　なに、めっちゃ彼氏ってバカなんじゃないの
男1　え、めっちゃ彼氏じゃん
女1　めっちゃってなに
男1　いやわかんないけど
男2　すげえってことですよね
女1　はあ？
男2　すげえ彼氏ってことですよね
女1　（男1）え、すげえ彼氏って何？
男1　え
男2　スーパーってことですよね

女1　スーパー彼氏ってこと？
男2　そう
男1　え
女1　スーパー彼氏は具体的にどういう存在なの
男2　（男1に）具体的にどういう存在なんですか？
男1　あ、えー
女1　……もういいよ
男1　え、あ、ごめん
男2　……（男1に）ごめんなさい

空気が重い。どんよりしている。

男2　……一旦、降りていいっすか？

誰も応えない。

男2　……降りますね

誰も応えない。男2、脚立から降りる。

男2　え、帰っていいすか

両者黙ってる。

男2　あ、帰りますね

男2、脚立を畳んで、

男2　……おっつかれさまでしたー

男2、脚立片手に颯爽と部屋から出ていく。

男1　……え、だ(れ)
女1　なんで来たの？
男1　なんでっていうか
女1　聞いてないし
男1　聞いてないしっていうか

女1　人の家に勝手に来るのってどうかと思う
男1　どうかと思うっていうか
女1　っていうか
男1　っていうか！連絡してるし、めっちゃ連絡してましたけども！それでいうと、連絡取れないから来たんですけど
女1　あー
男1　あーって、え、なに、なんなの
女1　そうね
男1　え、なんで会社来ないの？
女1　来ないのっていうか
男1　足？
女1　ああ
男1　いや、そんなに動けないなら言ってくれればいいのにさ
女1　足は、まあ大丈夫
男1　え
女1　うん
男1　え、大丈夫なの
女1　まあ
男1　……確かに、立ってるしね
女1　いや、でも、痛くはあるよ
男1　でも、歩けるんでしょ
女1　うん
男1　じゃあ、外出れるじゃん。会社来れるじゃん
女1　……うん
男1　え、なに
女1　いや……うん
男1　……俺？
女1　は？
男1　いや、俺、が原因なのかな、みたいな
女1　全然
男1　全然？
女1　全然そんなことなくて
男1　あ、そう

ホッとした様子の男1。少し冷静になったように伺える。
周りには干されっぱなしになっている洗濯物の数々。
女1はベッドに座る。

男1　畳まないの？
女1　なに
男1　洗濯物
女1　……生乾きだし
男1　エアコンか
女1　うん
男1　あ、ブラ……え
女1　なに
男1　え、これブラジャーじゃん！
女1　え、なに、声でかくない？
男1　え、ブラジャーじゃん
女1　ブラジャーですけど
男1　うん
女1　え、だめですか。干したら
男1　いや、それはさ、別にいいんだけど
女1　いいなら
男1　いや、そうじゃなくて、さっきまで、あの、ほら
女1　やまもと
男1　やまもとくん、さん
女1　同い年だよ
男1　誰と
女1　私と
男1　やまもとさんがさ、いたわけじゃん
女1　まあ、いたね
男1　でさ、ブラジャー干しっぱなしなのってどうなの
女1　どうなのって
男1　ツーパターンあるよね
女1　ツーパターン
男1　やむをえない場合とやむを得なくない場合
女1　だとしたら、大体の物事がツーパターンだと思うけどね
男1　やむを得ない場合っていうのは、ちょうど洗濯が終わった時に、ちょうどやまもとさんが来て。エアコンの修理だったら、多分、結構長い時間やるから、修理終わるの待ってるわけにもいかないし、いかないから、まあ仕方なく干して、見えずらいところに干して、っていうのが、やむを得ない場合じゃん
女1　じゃんって
男1　でさ、ほら、これ、乾いてんじゃん（と干してあるブラジャーを手に取る）

女1　ちょっと触んないでよ
男1　今、そこじゃないから
女1　は？
男1　今、ブラジャー触る触んないじゃないから、知らない男が
女1　やまもとだって
男1　だから誰だよやまもとって！知らないよ！知らない男が彼女の家で、彼女のブラジャーが普通に干してる家で、なんかエアコン直してるし、普通に。淡々とエアコン直して
女1　いや、（あんたが）急に来るから
男1　急にとかじゃないじゃん。もう一週間ですけど！一週間連絡取れないし、会社来ないし、来ないからみんな心配して
女1　みんなって誰
男1　はあ？
女1　みんなって誰よ！
男1　みんなはみんなでしょ
女1　別に誰も心配はしてないでしょ
男1　心配っていうか、それも、心配どうこうっていうか。仕事休んでるわけだから
女1　（ため息）
男1　……なに
女1　まあ……それは、そうね
男1　うん
女1　ごめんなさい
男1　あ、まあ、うん
女1　それ、返して
男1　え、あ、ごめん

男1、手に持ったブラジャーを女1に返す。

女1　……生乾き
男1　……エアコン、まだ直ってなかったんだ
女1　なんかめんどくさくて
男1　去年の秋だっけ
女1　そう……急にね、水が出るようになって
男1　でも、暖房は普通に使えてたんでしょ
女1　そう
男1　まあ、暖房だもんね。水出る要素がないか
女1　何それ

男1　え

気づけば、部屋の隅の扉付近に、紙袋が置いてある。なんか可愛らしいデザインの袋。実は、男1が部屋に入ってきた時に、持ってきていたのだ。

女1　それ
男1　これは、向島さんが持っていって渡してくださいって
女1　……カヨちゃんが？
男1　そう
女1　へー

男1、紙袋を持って女に渡そうとする。

女1　で、なによ
男1　え
女1　中身
男1　え、なんだろ
女1　え、中見てないの？
男1　うん
女1　あ、そう

女1、受け取った紙袋をそのままベッドの下にしまう。

男1　え、中見ないの
女1　うん
男1　……そう

女1、ベッドにごろんと寝転ぶ、男1には背を向けるように。

女1　（小声で）……ピーシャーマン……“シドニーワラビードオリヨンジュウニピーシャーマン”
男1　なんか言った？
女1　……なんでもない
男1　……洗濯物畳もうか？
女1　置いといて、生乾きだから
男1　いや、もう乾いてると思うけど
女1　置いといて

男1　……うん

誰も喋らない時間。男1はソワソワし始める。なんだか居心地が悪い気がしてくる、洗濯物に囲まれて、なんかこの部屋ジメジメする、気がする。
男1、ベランダに出る。生温い風が再び部屋に入り込む。薄いカーテンと洗濯物がゆらゆら揺れる。

男1　意外と近いよね
女1　……何が
男1　海
女1　ああ
男1　でも、行ったことないな
女1　海に行く理由がないからね
男1　え、理由がなくても行きたいでしょ、海は
女1　みんなそう言うよね
男1　みんなっていうか、少なくとも俺は、そうだけどね。理由がなくても海行きたいけどね
女1　なんで？
男1　なんでだろう、デカいからかな
女1　バカみたい

男1、少しだけ見ることができる海を眺める。

男1　夏の海はいいよね
女1　海は夏でしょ
男1　冬の海だっていいよ。葛飾北斎味があって
女1　冬なの？葛飾北斎の海って
男1　知らないけどさ、冬っぽくない？波とかめっちゃ白いし。冬の海には趣があるのよ
女1　寒いじゃん
男1　入ったら寒いよ。でも、それも趣きだよね
女1　入ってきたら、冬の海。死んじゃうよ
男1　死なないよ
女1　死ぬって
男1　死なないよ
女1　なんでわかんの、入ったことあんの冬に海
男1　あるよ

女1　あるの？
男1　うん
女1　バカじゃないの？
男1　……違うよ。ふざけて入ったわけではないよ
女1　え？
男1　あれ、話したことない？寒中水泳
女1　カンチュースイエイ？
男1　寒いに中に水泳
女1　寒中水泳ね
男1　学校の恒例行事でね。一月二十日の大寒に
女1　ダイカン？
男1　大きいに寒いで大寒
女1　なにそれ
男1　一年で一番寒い日
女1　わざわざ？一番寒い日に？
男1　一番寒い日だからこそでしょ
女1　うわ……今、ザワってした
男1　え？
女1　鳥肌
男1　そりゃ鳥肌もたつよ。寒いし、冷たいし、風強いし
女1　じゃなくてさ……なんだろう、ザワってした
男1　凄いんだよ。みんなで一斉に海入って、肩組んでさ、輪になるの。みんなで立ち泳ぎしながら五分間耐えて。町内の人もみんな浜に並んでさ。がんばれーとか言ってんの。五分終わって、浜上がってさ大拍手よ。ようがんばったようがんばったみたいな。そしたら、奥から湯気がモクモクのでっかい鍋が出て来てさ、町内の人から豚汁の差し入れです。って。みんなで豚汁食べたなー。美味かったなー。生きてるなーって感じしたよね。普通に食べる豚汁の五百倍うまかったな。……みんな元気かなー
女1　……あ、青春スメルだ。うわー
男1　なに？
女1　いや、なんでもないよ。なんでも
男1　……お義母さんから連絡あったよ
女1　え、お母さん？
男1　お義母さん
女1　うちの
男1　そう
女1　なんで？
男1　いや、連絡とれないからって

女1　あー
男1　みんな心配してるのよ
女1　……意外
男1　なにが
女1　みんなが心配していることが
男1　どういうこと？
女1　私のことを心配とかする世界なんだって思って
男1　全然意味わかんない
女1　いてもいなくてもわかんないと思ってたのに
男1　……どっか行く？
女1　え
男1　海とか？
女1　何いきなり
男1　まあ、いきなりでしょこういうのは
女1　……そういう恥ずかしいところとか、いいと思うよ
男1　恥ずかしいというのをちゃんと言葉にするなよ
女1　行かない
男1　あ、そう
女1　代わりにさ
男1　何
女1　体重計買ってきてよ。すごいいいやつ
男1　代わりに？
女1　代わりに
男1　体重計ね
女1　うん
男1　なんで
女1　年齢をさ計りたいから
男1　は？

暗転

第2場

数日後の昼過ぎ。
変わらず部屋。干してあった洗濯物が少し取り外されている。
女1は相変わらずベッドにいる。ベッドにはもう一人、女3がいる。
女3は、さっきまで干されていたであろう洗濯物を畳んでいる。

女3　……お父さんがね
女1　うん
女3　急にさ、俺実はスイカ嫌いなんだって言い出して
女1　急だね
女3　ほら、暑くなったからさ、お母さんがスイカ買ってきたの
女1　毎年食べてたじゃん
女3　でしょ、恒例じゃんうちの
女1　うちのっていうか、夏にスイカ食べるのは全国共通なんじゃないかな
女3　そうね
女1　なんでスイカ食べるんだろうね、日本人は
女3　バレンタイン的なことじゃない
女1　どういうこと
女3　あとは、あれ、土用の牛のうなぎみたいな
女1　うん？
女3　経営戦略だよ。夏、スイカ食べよう。っていうスイカ農家の策略
女1　え、すごくないそれ
女3　知らないけど
女1　だとしたらめちゃくちゃ成功してるよね
女3　そうだよ、日本中で夏にどれだけスイカ売れてんのって感じだもん
女1　やっぱりこういうのは意識の積み重ねだよね。徐々に徐々に夏はスイカだ。夏はスイカだよって何十年もいいきかせてさ、今ではもう夏になったら絶対スイカ食べなきゃいけない体になってるもん。遺伝子に組み込まれてるもん
女3　農家の力は偉大だね
女1　何代も絶やすことなくスイカを作り続けて、作って、噂流して、流して、遺伝子操作してきたんだもん
女3　遺伝子ね
女1　逆にさ、夏以外には食べられない体になってるよね日本人は
女3　スイカ？
女1　夏はスイカって言いすぎてさ。夏以外にスイカ見ると、すごい違和感持つようになってるよね

女3　そうかな、私そんなに気にしないけど
女1　まじで
女3　まじまじ
女1　そんなに好きだったスイカ
女3　いや、別にすごい好きってわけじゃないけど、別に冬に出てきても、やったスイカじゃんってなるよ
女1　え、じゃあさ、冬に冷やし中華でてきてもいいの？
女3　冬に冷たい物っていうのはまた別の話じゃないかな
女1　スイカも冷たくない？
女3　フルーツって基本冷たくない？
女1　え、スイカは野菜じゃん
女3　それ言い出したらもう終わりだよ
女1　終わり？
女3　だからお父さんがさ
女1　あ、終わり
女3　スイカ嫌いなんだって
女1　へー
女3　え、興味ない？
女1　いや、まあそりゃ嫌いな物もあるでしょ
女3　そうじゃなくてさ、スイカだよ。毎年食べてたのに今になってさ、実は嫌いだったんだって
女1　そうね
女3　そしたらお母さんも、え、なにそれ、ってなって。（お父さんが）なんで今更って、いや、別に今更っていうか、なんかちょっと量が多いからって……（女1に）お父さんの皿にさスイカ三切れ乗ってたの。確かにちょっと多いか、って思ったけど、それならこんなにいらないよって言えばいいじゃない。でもまあ、スイカ二日目だし、もう早く食べないと足早いからさ、食べなきゃいけないプレッシャーみたいなのをお父さんも感じてたみたいで……お姉ちゃんが家出てからさ、スイカの量に対して、四人が三人になったわけじゃん。お父さん男一人だし、頑張って食べてたんだよ、これまで。それが毎年毎年で、ついに今年限界を迎えたって感じ。正直に言わないと来年もだからね。
女1　スイカ食べたくなってきた
女3　話聞いてた？
女1　そういうこともあるよ、言えないことの積み重ね
女3　めちゃくちゃ喧嘩してるんだから
女1　あ、そうなんだ
女3　そうだよ

女1　めちゃくちゃ喧嘩してる話ならめちゃくちゃ喧嘩してる話ってちゃんと言わないと、全然真剣に聞いてなかったよ
女3　めちゃくちゃ喧嘩してる間にだんだんお姉ちゃんの話になって
女1　なんでよ
女3　（お父さんが）俺の食べる量が多いんだよ、（お母さんが）しょうがないでしょ三人なんだから、あいつは何してるんだ最近連絡ないけど、そうね、あの子なにしてんのかしら連絡ないわね、あの彼氏の、何くんだっけ、ワタルくんね、そうあの子に連絡したんだろ、したけどなんかパッとしないっていうか、なんだパッとしないって、ねえ、あんた（女3）ちょっと様子見に行ってよって
女1　今
女3　今
女1　……いいね
女3　何が
女1　私の家族って感じ
女3　全然意味わかんないけど
女1　スイカ食べたいな
女3　持ってきたよ
女1　え、そうなの
女3　うん、冷蔵庫入れといた
女1　ありがと
女3　……お姉ちゃんご飯食べてる？
女1　なんで
女3　冷蔵庫なんにも入ってなかったからさ
女1　ああ
女3　外食？
女1　いんや
女3　食べなきゃだめだよ、夏だし
女1　夏だし？
女3　なんかこの部屋ジメジメするし
女1　関係なくない？
女3　あとでなんか買ってくるよ

女3、洗濯物を畳み終える。

女1　ありがとね
女3　別にいいよ
女1　生乾きだったでしょ

女3　うーん、まあ、カラッカラに乾いてるかと言われたらわかんないけど
女1　なんか、畳んじゃったらカビ生える気がして
女3　それは……大丈夫だよ
女1　ありがとね
女3　……うん

女3、女1と共にベッドに寝転ぶ。

女3　……彼氏とうまくいってないの？
女1　どうして？
女3　まあ、なんとなくわかるよ
女1　別にうまくいってないわけじゃないんだけど
女3　パッとしない？
女1　パッとしないね
女3　そう
女1　……“シドニーワラビードオリヨンジュウニピーシャーマン”
女3　うわ、それなんだっけ
女1　あ、覚えてる？
女3　うわ、なんか、なんだ、気持ち悪い
女1　なんでよ
女3　“シドニーワラビードオリヨンジュウニピーシャーマン”
女1　“シドニーワラビードオリヨンジュウニピーシャーマン”
女3　言えるのに思い出せない
女1　口が覚えてるんだよ
女3　なんだっけこれ
女1　あいつ、浮気してんだよ
女3　……彼氏？
女1　うん
女3　パッとしない？
女1　パッとしない
女3　まじ？
女1　多分ね
女3　……そう
女1　……わかんないけど

ピンポーンと音がする。誰かがこの部屋のインターホンを押したのだ。

女1　え、誰だろ
女3　彼氏？
女1　あいつは、ピンポンを押すとかそういうのはない
女3　まじで
女1　うん
女3　……私見てこよっか
女1　ありがと
女3　うん

女3、扉から出ていく。
女1、壁に着いているエアコンを見る。エアコンは相変わらず直っておらず、ポタポタと水が垂れている。

女1　ポタポタしてんじゃねえよ

少しして、女2が入ってくる。小綺麗なスーツ姿。手には紙袋。先日、男1が持って来たものと同じ物で、可愛らしいデザインが施されている。

女1　あら
女2　……どうもです

続いて女3が入ってくる。

女1　（女3に）同僚のカヨちゃん
女2　（女3に）後輩の向島です
女3　あ、妹です
女1　（女2に）妹です
女2　どうも
女1　あ、座る？
女2　あ

と見渡してみても、椅子や座布団のようなものはない。

女3　……地べたですいません
女1　うん、ごめんね
女2　いや、こちらこそ、急に来てすいません
女1　いや全然

女2　一応連絡してたんですけど
女1　うん、ごめんね
女2　あ、いや
女3　……スイカ食べます？
女2　え
女3　実家からちょうど持ってきてて
女2　あ、ごめんなさい。私、スイカ苦手で
女1　え、そうなんだ
女2　はい、なんか水っぽくないですか
女1　水っぽいね、スイカだからね
女2　水っぽいっていうか水っていうか。スイカ水を固めて食べてるみたいな感じして、大きさと見た目のインパクトの割に、味がパッとしないっていうか
女1　すごい嫌いじゃん
女2　すごい嫌いってわけでもないんですけど。（女3に）なので、すいません。
女3　いや、全然いいんですけど
女1　食べれば？
女2　……え
女1　食べればスイカ。夏だし。

女1、まっすぐ女2を見ている。女2も視線を外さない。

女1　（女3に）買い物行ってきてよ
女3　え
女1　なんか、あとで買いに行くとか言ってなかった？
女3　あ、うん、じゃあ、そうしよっかな

女3、自分の荷物を持ち出ていく。

女2　……心配、してたんですよ
女1　ごめんね
女2　龍池さんも連絡取れないって聞いてたんで
女1　うん
女2　元気そう……かな
女1　え
女2　いや、なんか絶妙だなって思って
女1　……。
女2　っていうか、こういう時って難しくないですか？どこを基準にするのかによ

って元気って変わってくるっていうか。そりゃまあ……ユリさんが会社に来てた頃を基準にするなら今はまあ……それよりは元気なさそうっていうか、顔色悪そう、っていうか悪いじゃないですか。それは、まあ事実として。で……でも、そのまあ仕事とか休んでるから、結構長い間。だから……なんていうんですか、もっと元気じゃない可能性とかも全然あったわけですし、それは。だから、もっと元気じゃない可能性を考えてた場合ですよ、まあ、今の状態は思ったより元気そうかなって、まあそういうことです。はい。

女1　え……どっち？

女2　え

女1　どっちを想定してきてたの？

女2　あー

女1　うん

女2　……そう考えると別にどっちも考えてなかったっていうか、さっき、顔みてどっちも思ったかもしれないです

女1　なるほどね

女2　はい

女1　……ごめんね、仕事休んじゃって

女2　あ、いや、それは全然大丈夫……かな

女1　え

女2　え

女1　え、デジャブ？

女2　あ、いや、ただの二回目です

女1　あ、そうだよね

女2　はい

女1　……。

女2　いや、違いますよ。これも、その、全然迷惑とかはないっていうと、まあさすがにそれは嘘というか

女1　それは……そうね

女2　でも、なんかそれもどれを基準にするかっていうか……たしかに元々と比べたらまあ一人がやってた仕事をみんなで回してやるわけだから、あー結構やること増えたかもみたいなことは、まああるわけじゃないですか。でもそれって心理的でしかないというか、結局一日の働く時間は決まってるわけで。仕事の量が増えたところで活動量は変わんないし、みたいな。それに、まあ、私たちの仕事はいい意味でみんなで分担しやすいんで、そう考えると迷惑とかは今はもうそんなにないかなみたいな

女1　……そっか

女2　（女1の包帯を見て）足大丈夫なんですか？

女1　うん、もう結構治ってきたかも
女2　小指でしたっけ？
女1　そう
女2　痛そうですね
女1　うん、痛いよ。歩くたびにね、ちょっとだけ痛いの。もう、すごい痛い時期は超えちゃったんだけど、それでも、ちょぴっとずつ痛いの
女2　治ってきてるってことですよ
女1　……ありがと

女2、何かが気になって部屋を見渡す。洗濯物はもうほとんど乾いているはずなのに。

女2　なんか……いや、別にいいんですけど
女1　なに
女2　なんかじめってしてません
女1　ごめんね、暑い？
女2　暑くはないんですけど、なんかじめっとしてるのがなんなんだろうって、涼しいのに
女1　エアコンが壊れてて
女2　あー
女1　すごい、水がポタポタ
女2　きついですね
女1　うん、せっかく引きこもってるのに、家の居心地が悪いんだよね
女2　あ、引きこもってるのって自覚あるんですね
女1　もちろん
女2　いいですね
女1　いいかな？
女2　私、ユリさんのそういうとこ好きですよ
女1　私もカヨちゃんのそういうところいいと思う
女2　え、どこですか？
女1　なんだろうね
女2　換気してもいいですか？
女1　うん……そういうところだよね

女2がベランダに続く窓を開ける。気づけば少し日が落ち始めている。

女2　ここって海見えるんですか？

女1　あー、ギリギリ
女2　ギリギリ？
女1　ほら、その隅の方でさキラキラってなってるの
女2　キラキラ？
女1　キラキラは言い過ぎか
女2　あの黒いとこですか？
女1　黒い……黒いかな
女2　え、あそこの隅の緑の……
女1　そうそう、緑の
女2　ところの地続きになってる感じの、黒い……
女1　ああ、まあ黒いかな
女2　確かにギリギリ見えますね
女1　キラキラしてると思うけどね
女2　そうかな
女1　どうだろ
女2　……突然海行く？とかいう人どう思います？
女1　え、急だね
女2　急にいう人いるんですよ
女1　まあ、そういう人もいるだろうね
女2　どう思います？
女1　関係性にもよるかな
女2　それは、そうですね
女1　ほら、部長に言われたらきついでしょ
女2　きついっすね、それは
女1　言われたの最近？
女2　はい
女1　急に
女2　急に……海行かない？って
女1　どう思うの？
女2　うわ、なんか、きしょいかもって
女1　あ、そうなんだ
女2　まあ、はい
女1　私は、素敵だと思うけどな
女2　え、素敵ですか
女1　素敵は言いすぎた、けど、まあいいかもって感じ
女2　いいかもって
女1　キラキラ？

女2　ダサいっすね
女1　ダサいのって意識的に身近に置いとかないとだめだと思うんだよね……人間って、無意識的にダサくなってっちゃうからさ、これダサいよねっていうのを意識し続けないと気づけばダサくなるっていう
女2　なるほど
女1　（海の方を見て）どうキラキラしてきた？
女2　……たしかにちょっとキラキラしてきたかもしれません
女1　よし
女2　なんか痩せました？
女1　私？……そうかな
女2　ご飯とか食べてます？
女1　うーん、なんかあんまりお腹空かないんだよね
女2　ちゃんと食べなきゃだめですよ、夏ですから
女1　あれ？
女2　なんですか？
女1　なんか……デジャブ

また、突然、男1が入ってくる。スーツ姿だ。

男1　（女2を見て）あ
女2　あ、どうも
男1　来てたんだ
女2　はい、お見舞いに
女1　出たよ
男1　何
女1　なんで急に来るわけ
男1　いいでしょ、別に
女1　どう思うカヨちゃん、インターホン鳴らさずに入ってくんの鍵開けて
女2　まあ、でも、まあ
男1　何の話してたの？
女2　えっと……
女1　海が見えるって話
男1　あーね。そうそう、こっからだと見えるのよ海
女2　まあ、見えるって言うか……
男1　見えるよね
女1　見える見える、（女2に）ね
女2　……はい

男1　いいよねー、海
女1　バカみたい
男1　どこへでもいける気がするよね。この向こう側にも国があって人が住んでるんだなーって
女1　まあ、海だからね
男1　旅行行きたいなー
女2　龍池さんって、旅行の計画とか綿密に立てるタイプですよね
男1　え、普通じゃないそれ
女1　普通かな
男1　旅行なんか予定立てる所が一番楽しいんだから
女1　（女2に）え、わかる？
女2　全然
男1　予定立てる時に、色々調べるじゃん。海外旅行だったら、その国のガイドブック、違う会社のやつ3冊くらい買ってきてさ、全部読むの。そうすると、被ってる情報が出てきて、それによってその観光地とかの重要度がわかってくるわけ
女2　へー
男1　実際には時間ないから全部は行けないんだけど、調べてる間はそういう制限ないわけだから、全部見たいじゃん。だから、予定立ててる時が一番楽しい
女1　絶望しないの？
男1　なにそれ
女1　色々調べても全部行けるわけじゃないんでしょ
男1　時間と予算は限られてるからね
女1　実際には体験できない楽しいことを、わざわざ調べて知っちゃってさ。ああ、これもできない、あれもできないって思わない？
男1　全然
女1　あ、そう
女2　龍池さんって、予定通りに行かなかったらすごいイライラしそうですよね
男1　しないよ
女1　するよ
男1　しないよ
女2　しそう
男1　え、しないよ。何だと思ってんの
女1　してもいいんだよ
男1　え
女2　してもいいんですよ
女1　ね
女2　ね

男1　え、全然意味わかんない
女2　……帰ります
男1　あ、もう
女2　はい、明日も仕事なんで
男1　まあ、そうだね
女1　スイカ食べないの？
男1　あ、スイカあんの？
女2　嫌いなんで
女1　夏なのに
女2　それ、全然意味わかんないですよ
女1　ちょっと待ってて

女1、部屋の外へ出ていく。

男1　向島さん、スイカ嫌いだったんだね
女2　は？
男1　え
女2　嫌いですけど、ダメですか
男1　いや、ダメじゃないけど
女2　夏だからスイカ食べればってなんですか、なんなんですか
男1　まあ、スイカは夏だし、夏はスイカだけどね
女2　まあ……いいんですけど
男1　でさ、わかった？
女2　え
男1　なんで引きこもっているのか
女2　あー
男1　あーって
女2　忘れてました、それ
男1　え、なんで忘れちゃうの。そのために来たんだよね
女2　まあ、そうですね
男1　びっくりしたよ、まだ居るから。お見舞いしてすぐ帰るって話じゃなかったっけ
女2　いや、すぐ帰ろうと思いましたけど、なんか二人きりになって
男1　え
女2　なってっていうか、させられて
男1　え、誰かいたの？
女2　妹さん？

男1　へー、あ、そう
女2　会ったことあるんですか？
男1　一回だけね、一応
女2　片山さん、なんか怖かったですよ
男1　え、まじで
女2　（男1に近づいて、小声で）……バレたんじゃないですか
男1　え
女2　多分
男1　いや、そんなことないと思うけどね
女2　いやーどうかな
男1　いやー
女2　……。
男1　いやー、ないと思うけどな
女2　……全然キラキラしない
男1　え、なんの話
女2　……海ですよ
男1　そうそう、ここから見えるんだよ
女2　見えるって言うか、見えてないと同義ですよ、あんなの。旅館とか予約して、海が見えますって言われてて、いざ見てこれだったら結構本気でクレーム入れちゃうかも
男1　でも、海が見える見えないの0、1は全然違うけどね
女2　海好きですね
男1　まあ、特別海が好きっていうわけでもないんだけど
女2　どっちですか
男1　海も山も川も空も好きだよ
女2　ダサいっすね
男1　え、そう？
女2　急に死にたくなったりしないんですか？
男1　なにそれ
女2　海とか見てると、空とかも……こんなに綺麗ならもう死んじゃってもいいなって思う時
男1　全然わかんない
女2　でもこの海はないな、全然
男1　遠いからじゃない？近づいたら綺麗なんじゃないかな
女2　近づいて綺麗だったらそれこそ死んじゃいますよ
男1　……向島さんはたまにそういう突拍子もないことを言うよね
女2　突拍子もないって思ってる時点で、龍池さんは相当幸せ者だと思いますよ

男1　なにが
女2　いや別に
男1　そういうのさ！
女2　……なんですか
男1　……まあ、いいんだけど

男1、ベッドに腰掛ける。少しふてくされた様子。
女2、その様子を見て、

女2　……小さい頃、近くの浜に鯨の死体が打ち上げられてて……ほら、テレビで見たことないですか、砂浜に横たわってるやつ
男1　ああ、あるある。ああいうの見るとマジでデカいんだなって思うよね
女2　実際見るともっとでかく感じるんですよ。死んでから体内のガスでパンパンに膨らんでて……しかも凄い臭いんですよね。それが、魚の臭さじゃなくて、哺乳類の……まあ鯨は哺乳類なんであたりまえなんですけど、哺乳類が死んだ匂い……小学校の時、弟が友達からハムスターもらって来て、世話しないからあっという間に死んじゃったんですけど、その時と同じ匂いしてました。それで、消防隊の人とかが集まって、危険です離れてください爆発しますって……見たことないですか、テレビで鯨が爆発してるところ
男1　それはないな
女2　本当はね、鯨って、死んだらそのまま海の底に沈んでいくんですよ。それで、海の底で、でっかい体を何年もかけて食べられて、そこに新しい生態系ができるんですって……静かな海の底で死ぬはずだったのに、砂浜で、地上で、たくさんの人間に囲まれて、爆発物扱いされて、燃えるゴミかなんかで燃やされるんでしょ。それ見てて……私は絶対に自分の死に場所は自分で決めようって思いました。自分の気にいった場所で死のうって。だったら綺麗なところの方がいいでしょ。……（窓の外を見て）あ

気づけば夕方。部屋には夕陽が差し込んでいる。

男1　あいつさ、浮気してんだよ
女2　……はあ
男1　まじでまじで
女2　どの口が言ってるんですか
男1　そういうことじゃなくてさ
女2　なんでですか？
男1　居たんだよ、男が。なんか髭の

女2　髭の？龍池さんとは全然違うタイプですね
男1　そうなの、そうなんだよ。髭、つなぎの人
女2　メガネ、スーツですもんね
男1　なんか、この間連絡取れないからって、ここ来てみたのよ。そしたら、髭でつなぎの人がエアコン直してて
女2　じゃあ、エアコン業者の人なんじゃないですか
男1　いや、それがエアコン直してるわけじゃなかったのよ。ほら直ってないでしょ実際
女2　まあ……たしかに
男1　しかも、なんか楽しげに話してて
女2　盗み聞きですか、サイテー
男1　違うよ。鍵開けて、ドア開けたら完全に男の靴が置いてあってさ。え、誰。みたいな。最初は、あっちの身内のさ、お義父さんとか来てんのかなとか思って、ビビったんだけど、あきらかにお義父さんとかの年代では履かない感じの。若いスニーカーみたいなので。じゃあ、身内は違うな。男兄弟いるとか聞いてないしって、思ったの。じゃあ誰だ。二番目に出てきたのは完全にあれだ、泥棒だって思ったのだからさ、恐る恐る近づいて、そしたらなんか楽しそうな話し声聞こえてきて
女2　ヤってたんですか？
男1　バ、バカ、バカバカ、バカじゃないの！
女2　え、違うの
男1　お前、そういうことをさ……ああ、バカバカ
女2　いや、だって浮気っていうから
男1　そんな所見ちゃったら浮気どうのこうのじゃないでしょ、警察だよそんなの
女2　なんで警察行っちゃうんですか
男1　だって、お前……そんなの見ちゃったら、刺しちゃうでしょ
女2　あ、自首する側ですか
男1　怖いこと言うなよ
女2　大丈夫ですよ、刺せないですって龍池さんには
男1　そういうことじゃなくてさ
女2　刺すとかそういうことはできませんよ
男1　いや、そういうことが言いたいんじゃなくて
女2　なんですか
男1　……だからかなって思って
女2　何が
男1　引きこもってるの
女2　……え、全然繋がらないんですけど
男1　いや、俺だって繋がらないよ。繋がらないんだけど、そのなんていうんだろ

う。だって、引きこもる前と引きこもった後って変わったのそれぐらいって言うか、なんか急に現れた髭の男なんだもん。
女2　なんだもんって。龍池さんが知らないだけじゃないですか、その人を
男1　いや、まあそうだけど、そんな得体の知れない職業の人が友達にいる感じしないじゃん
女2　そうですか？
男1　俺はとりあえず、そういう感じの人付き合いみたいものはさ、ユリから感じなかったからさ
女2　はあ
男1　……クスリとかやってんのかな？
女2　はあ？
男1　だってクスリとかやってそうだよ、あの髭
女2　流石にそれはないんじゃないですかね
女1（声）　あ、おかえり
女3（声）　ただいま
女1（声）　え、そんないっぱい買ってきて
女3（声）　だって冷蔵庫空っぽなんだもん
女1（声）　だもんって言われても
女3（声）　ちょっと廊下暑くない？

廊下の方から声がした後、女3が部屋に入ってくる。
男1、開いていた窓を閉める。

女3　（男1を見つけて）あ
男1　あ、お久しぶりです
女3　……お久しぶりです
男1　すいません、お邪魔しちゃってて
女3　いや、全然私の部屋ではないので
男1　……あの
女3　はい
男1　ちょっと
女3　はい？
男1　ちょっと（と女3を手招きする）
女3　はあ（と男1に近づく）
男1　……お姉ちゃんなんで引きこもってんの？
女3　え
男1　なんか聞いてない？

女3　いや、全然
男1　え、そうなんだ
女3　全然、なんにも聞いてないです
男1　あ、そっか
女3　はい
男1　なんかクスリとか
女2　え
女3　はい？
男1　いや、なんでもないや……ありがと
女3　こっちも聞いていいですか？
男1　なに？
女3　浮気してるんですか？
男1　え
女3　彼氏さん浮気してるんですか

間

男1　え、誰がそんな
女3　お姉ちゃんです
男1　え、してないよ
女3　してない感じじゃなかったですよ、今の反応
男1　え、そう
女3　はい。完全に、絵に描いたような、ドラマでよく見る感じのギクって感じでしたよ
男1　そんなことないよ
女3　ギクって言ってましたよ
男1　言ってないよ
女3　言ってみてくださいよ
男1　え
女3　ギクって
男1　あれ、そんな感じだったっけ？
女3　何がですか？
男1　そんな、怖い感じでしたっけ？
女3　実の姉がパッとしない彼氏に浮気されてるかもしれない時の妹と、初めて姉の彼氏が家に来た時の妹が一緒なわけないでしょ！
男1　声でかいよ
女3　何！

男1　わかったから、落ち着いて
女3　ほら言えよ
男1　何を
女3　ギクって
男1　何言ってんの
女3　ギクって言ってみなさいよ
男1　まじで何言ってんの
女2　言ってみたらいいんじゃないですか？
男1　は？
女2　龍池さん、浮気してないならはっきり言ってやった方がいいですよ、ギクって
男1　え
女2　（女3に）ね
女3　……はい
女2　（男1に）だって
男1　……じゃあ……ギク
女2　……どう？
女3　わかんないです
男1　なにそれ
女2　妹さんはさ
女3　はい
女2　今、自分が結構失礼なことしてるっていう自覚はあるの？
女3　え
女2　龍池さんに対して、結構な失礼を働いているっていう自覚はあるの？
女3　それはまあ、ありますよ
男1　向島さんいいよ別に
女2　龍池さんは黙っててください！
男1　え
女2　問い詰められて戸惑って、そんな犯人ムーブしたら、妹さんだって疑いたくなるのも当然じゃないですか
男1　犯人ムーブ？
女2　（女3に）でさ
女3　なんですか
女2　その疑いのパーセンテージはどれくらいなわけ？
女3　え
女2　だって、妹さんは龍池さんと一回しか会ったことないわけでしょ。それで、片山さんに龍池さんが浮気してるかもしれないって言われただけなんでしょ
女3　だけって、まあそうですね

女2　ほんとに？
女3　え
女2　ほんとにそれだけ？証拠とかないの？
女3　え
男1　え、それは
女2　龍池さんは黙っていてください！
男1　ごめんて
女2　物的証拠とかはないの？
女3　はい
女2　ほんとに
女3　……まあ
女2　ないのに、そんな失礼なことをさ、言っちゃってるわけ？
女3　まあ……ですね
女2　それってどうなんだろう
女3　それは、確かに良くないかも知れません
女2　そうだよね
女3　なんか、勢いで
女2　勢いで、いけると思ったんだ
女3　……はい
女2　良くないね！良くない良くない
女3　……すいません。
女2　まあ……でもそういうお年頃だもんね
男1　そういうお年頃とかないでしょ
女2　そういうお年頃なんだから許してあげたらいいんじゃないですか？
男1　え、まあ、別にいいんだけど
女3　ごめんなさい
男1　いや……まあいいんだけどね
女2　物的証拠ないらしいですよ、龍池さん
男1　いや、証拠とかはさ
女2　良かったですね
男1　いや違くて
女2　そりゃないですよね
男1　そうだよ、ないよ。だって浮気してないんだから
女3　してないならいいんですけど
男1　むしろさ……浮気してるんじゃないかなって思って
女3　は？え、お姉ちゃんがですか
男1　それで、なんか知らないかなって思って

女3　え、いや、え、どうなんだろう、そんなことないと思いますけど
男1　髭の、つなぎの人知らない？
女3　いや
男1　じゃあさ、なんで引きこもってんの？
女3　それは……わかんないです

女1が戻ってくる。手には何も持っていない。

女1　何してんの？
男1・女3　別に
女2　「別に」でハモった。すげー

女1、ベッドに座ろうとする。

男1　あれ、スイカは？
女1　ああ
男1　ああ、って……スイカ取りに行ってたんじゃないの
女1　だって、カヨちゃんスイカ嫌いだから
男1　はあ？
女1　ね
女2　……だからなんですか。ダメですかスイカ嫌いだと
女1　別にダメじゃないけど
女2　龍池さん浮気してますよ
男1・女3　はあ⁉
女1　ハモった
男1　え、何言ってんの！
女3　何言ってるんですか？
男1　え
女3　え
女2　ダメですか？
男1　ダメって言うか。ダメでしょ
女3　え、浮気してるんですか
女2　してるよ。ね、龍池さん
男1　え、してないよ
女2　してるよ
男1　してないよ
女2　してるよ。さっき、妹さんもしてるって言ってたじゃん、ね

女3　え
男1　言ってたけど、それはしてないからしてないって所に収まったわけじゃん、ね
女3　え。あ、え、どうでしたっけ
女2　しっかりしなよ！
女3　私ですか？私が悪いんですか！
男1　いや、悪くないよ
女3　浮気してるんですか？浮気してるのに、お姉ちゃんの浮気疑ってたんですか？
女1　え
男1　え、なんでそれ言っちゃうの？
女3　何がですか？
男1　それは、その、ナイーブな話だからさ、隠密に秘密裏に捜査しようって、そういう話だったじゃん
女3　そんな話してませんよ
女1　え、私？
女2　片山さんです
女1　え、龍池君じゃなくて
男1　いや、俺違くて
女3　ちょっと黙っててくださいよ
男1　え、なんで黙ってないといけないの。っていうか君誰だよ！
女3　妹ですけど！
男1　いや、それは知ってるけど、一番関係ないよね君が、今、この場にいる中では？違いますけど、一番関係ないのはこの人(女2)ですけど
男1　それは……そうだね
女2　あ、じゃあ帰っていいですか
女1　スイ（カ食べないの？）
女2　スイカ食べませんよ嫌いなんで!!
女1　……持って帰る？
女2　片山さんなんで引きこもってるんですか
女1　今、関係ないよね
女2　関係なくないでしょ
女1　関係ないよ、龍池君が浮気してるって話でしょ
男1　いや、だからそれは違くて
女3　何が違うんですか
男1　君関係ないでしょ
女3　いやだから
男1　だからじゃなくて！向島さんも君も関係ないよね

女3　関係なかったら喋っちゃダメですか
男1　ダメですかっていうか、ややこしいでしょ。現に話が進んでないから全く
女3　じゃあ、一旦整理していいですか
男1　君が？
女3　その、君がっていうのやめれます？気持ち悪いんですけど
男1　気持ち悪い⁉
女1　それは私も思ってた
女2　私もです
男1　ま、お……それは、ごめんなさい
女3　で、なんでしたっけ、えっと
女1　カヨちゃんと龍池君が浮気してるって話でしょ
女3　は？
女1　……違うの？
男1　え
女2　そうです
男1　え
女1　でしょ
女3　……全然着いていけないんですけど。え、何どういうこと？
女2　私が龍池さんとヤっちゃったってこと
女3　は⁉
男1　え、何言ってんの？
女3　え、だってさっき、私すごい怒られましたけど
女2　うん、ごめんね
女3　もう全然意味わかんない……吐きそう
男1　俺も
女3　なんでよ
男1　全然着いていけない……吐きそう
女1　吐くならトイレ行ってね
男1　……そうします
女3　え、まじで

男1、部屋の外へ。

女3　……あの、ほんとに整理していい？
女1　うん
女3　あなた（女2）が、あの人と浮気してて、しかも……お姉ちゃんも髭、つなぎと浮気してるってこと？

女1　髭つなぎ？
女2　髭でツナギの人が部屋にたむろしてるって
女1　ああ、やまもとね
女3　やまもと？
女1　まあ、それはどうでもいいからさ
女2　片山さんなんで引きこもってるんですか
女1　なんで、って言われても
女2　私のせいですか
女1　え
女2　私が、龍池さんとヤっちゃったからですか
女3　何その態度
女2　は？
女3　謝りなよ
女2　私が？
女3　他に誰がいんのよ！
女2　嫌に決まってんじゃん！
女3　決まってるわけないじゃん！
女1　まあまあ、落ち着いて
女2　何それ
女1　……。
女2　何、落ち着いてって。ふざけないでくださいよ。ユリさんのそういう所私すごい嫌いです。何その包帯。小指骨折して、彼氏に浮気されたくらいで会社休んで、引きこもりですか。自分だけ、そんなに辛いですか
女3　そんな言い方
女2　あんた誰よ、ほんとに！妹だかなんだか知らないけど、でしゃばってきてめんどくさい
女3　何やけになって
女2　やけにもなるでしょ。めんどくさいの！めんどくさい。大体、元々そんなに好きじゃなかったし、ユリさんのこと。ユリさんって、あれですよね。意識的に自分中心で、意識的に周りを遠ざけますよね。エレベーターとか乗る時も、あとから人来てるの分かってて、開けるボタンとか押さないですよね。資料配布の時とかも自分の以外には手をつけないで、その癖持ってきて貰ったものはそのまま貰いますよね。そんな奴がさ、社内恋愛とかするなよ、めんどくさい。そりゃ、やってる本人たちはいいかも知れないけどさ、こっちはもうめんどくさいんですよ。無意識で気使っちゃうの。なんか、職場ではあんまり喋らないようにする感じとかもめんどくさいし。それに、気を使うのもめんどくさいし。我関せずみたいな人が、周りに気使わせんじゃねえよ

女1　だから何
女2　だから、めんどくさいって話ですよ！たいして好きでもないっていうか、むしろ合わない。全然合わない、パッとしない職場の先輩と、たまたま、気まぐれでっていうか、ノリで一回やっちゃっただけなのに。それで、ユリさんに引きこまれたらたまったもんじゃないっていうか
女1　ノリでって
女2　もう帰っていいですか
女3　いいわけないじゃん
女2　あんたには聞いてない！
女1　別にいいよ
女3　え
女2　……ですよね、ユリさんもめんどくさいんですよね。っていうか龍池さんと別れたいんですよね。ずっと別れたかったんですよね。それを自分から言いたくないんですよね、それでこんなことなってるんですよね
男1　そうなの

男1、戻ってくる。

男1　え……別れたいの
女3　盗み聞き
男1　え、ずっと前から別れたかったの？
女1　うん
男1　うんって……
女1　生きてる世界が違いすぎるんだもん
男1　何それ
女1　龍池君はもうこれ以上いきたくないなって思ったことないでしょ
男1　は？会社の話？
女1　ほら通じてない
男1　え、何
女2　龍池さんは死にたいって思ったことないですよね
女1　まあ……ちょっと違うけど
男1　ないよ、ないに決まってんじゃん
女1　決まってんじゃんって
男1　なに、ダメですか
女1　普通に会社行けとか言うし、小指折れてんのに
男1　だからそれはさ
女1　無理なの、無理です。一緒に生活したりとか、一緒の映画見て感想言い合った

りとか、だって生きてる世界がちがうんだもん
男1　だもんって、え、何そんな理由？
女1　そんな理由っていうのもさ
男1　もうその感じさ、すごい嫌なんだよね！
女1　何が
男1　向島さんも
女2　私？
男1　なんかことあるごとに、死にたい死にたい、絶望みたいな
女2　そんなこと
男1　死にたいのがそんなに偉いのかよ！すぐそれだよ、ユリも向島さんも！海見て、死にたいじゃねえよ、生きろよ！生きてく奴の方が偉いだろ！小指骨折したくらいでなんだよ、会社来いよ、仕事しろよ。海見て明日も頑張ろうって思えよ！その向こう側に生活を感じろよ！こんな、ジメジメした部屋でさ、籠ってたってしょうがないんだから、明日の楽しみをさ、自分で見つけて、楽しみなさいよ！海行きなさいよ！こっから見えるんだから。なんだよ、この部屋ジメジメするし、涼しいのにジメジメするし、ヤマモトさんに直して貰ったんじゃないのかよ。っていうかヤマモトって誰だよ！ああ、もう、帰りたい！なんだよマジで、何これ、どこここ。俺か⁉俺なのか！俺だけが悪いのか！……あれだから、俺も別れたかったから
女3　はあ⁉
男1　だって、もうあれだもん。ほら……洗濯もの干しっぱなしだし！あと……あれね、超インドア、ベリベリインドア！あと、あれだよ……いびきがうるさいんだよ！
女1　え
男1　気づいてないかもしれないけど、結構デカいよいびき！なんでか知らないけど！人体って不思議だよね！ああ……もう嘘！嘘です！嘘嘘！違くて違くて、そういうことじゃなくて。もう、ごめんなさい！一回だけホテル行きました、すいませんでした。すいませんでした！
女3　謝った……二回謝った
女1　……ヤマモトはね大学の時の友達で
男1　はい？
女1　ヤマモトは無駄話が多くて……エスカレータ乗る時は歩かないで止まって乗るし、ポテチだったらサワークリームが好きで、重い荷物がどれだけ重くても誰にも言わずに持ってるタイプで。……昔、コンビニから飲み物買って帰る時、重いくせに一つのビニール袋に全部まとめるから、袋の持つところが伸びちゃって、……この細い、あれ、なんだっけ、ほら、歯とかの隙間を通す
女3　フロス？
女1　フロスみたいになっちゃってさ、重いくせに、重い？って聞いたら、普通って言って、何普通ってみたいな

男1　え、なんの話？
女1　やまもとの話。そしたら、おっちゃんが
男1　え、誰？
女1　おっちゃん。大学の友達。おっちゃんがね、重さの普通って何よって言い出して
男1　え、今からおっちゃんの話するの？
女1　あ、えっと……なんの話だっけ
男1　え？
女3　やまもとさんの話？
女1　まあ、もうちょっとで来るから聞いたらいいよ
男1　やまもとさん？なんで
女1　エアコン直しにに決まってんじゃん
男1　決まってんじゃんって
女1　龍池くん……私死にたいわけじゃないよ。生きたくないんだよ
女2　一緒じゃん
女1　カヨちゃんと一緒にしないで
女2　（舌打ち）
男1　え、で、その、ヤマモトさんとは、あの……その……
女2　そんなに聞きたいんですか、片山さんとその人がヤったかどうか
男1　聞きたいって言うか
女1　もう帰っていいよ
男1　……え
女1　カヨちゃんも、ありがとね
女2　は？
女1　お見舞い

女1、ベッドの下の荷物をガサゴソ。見覚えのある紙袋を持って、

女1　これもらったけど、開けてないから、中身知らないけど、良かったら

と、女2の前に置く。同じ柄の紙袋が二つ。

女1　ああ、いいね、さびしくない

女1、ベランダに出る。
気づけば陽は落ちている。

女1　龍池くん、カヨちゃん、別に違うから
男1・女2　……。
女1　別に二人がどうのこうのしたから引きこもったわけじゃないから。多分
男1　多分って
女1　いや、よくわかんないんだよね。やっぱりあれかな骨折れたからかな、なんかちょっとずつ痛いんだよね。なんだろ……じゃあね。またね

ピンポーンと音がする

女1　あ

突然、男1、走って扉の方へ。外に出ていく。

男1（声）　やまもと!!
男2（声）　なになに！誰！
男1（声）　スーパー彼氏だよ!!

物凄い物音が扉の奥から聞こえる。

暗転

第3場

夜。少し時間が経った部屋。男2が脚立に乗ってエアコンをいじっている。女3もいる。片手には洗濯カゴを持っていて、洗濯が終わった洋服を順々に干している。

男2　すげー、怖かったよ。ほんと。なんかスローモーションに見えたよね。こう彼氏さん出てきて
女3　もう彼氏じゃないです
男2　あ、そうだっけ。じゃあ、その元彼氏が出てきてさ、こう完全に殴りそうな、殴られそうな感じになってる、俺がっていうのを、その一瞬で感じてさ
女3　まあ、あんな大声で名前呼ばれながら向かってこられたらね
男2　すげー怖かったよ。スローモーションだよ。（スローで）やーまーもーとー、ブワンブワンブワンブワン、やばい殴られる！スーパーかれしだよー、ブワンブワンブワンブワン、ドテッて
女3　コケてましたね、龍池さん
男2　いや、なんかすごい申し訳ないって言うか。やっぱり理想はこう取っ組み合いの喧嘩になって、俺お前のことゼッテー許さねえ的な、俺の彼女に手出すんじゃねえよ的なことをやりたかったんだろうけどね。なんせ怖いから、突然こられたら。なんで怒ってるのかもよくわかんねえし
女3　メガネとか壊れちゃってましたもんね
男2　いやー青春スメルがプンプンしたよね
女3　なんですかそれ
男2　え、おじさんになったら感じる独特のスメル
女3　え？
男2　え、わかんない？中学、高校生くらいがさ、男女六人くらいで電車乗ってさ。まあ、その時点でもう十分青春スメルなんだけどさ、そのまま動物園前で降りてるの見た時とか、大人数で動物園て！みたいな。それで、六人中四人は前の方にそのまま行くんだけど、男女二人だけ、その後ろついて行くのとか見た時とか、スメル感じない？
女3　全然わかんない
男2　若いね
女3　いや全然
男2　感じないかな、その六人はどういう関係性なんだ。その二人だけいい感じなのか？みたいな

女3、洗濯物を全部干し終わる。

女3　……逆に良かったと思いますよ
男2　何が？動物園が？
女3　龍池さんですよ
男2　え、元スーパー彼氏？
女3　だって、やまもとさん殴っといて、そのあと結局全部勘違いでした。ってなったら超ダサいですよ。まあ、メガネ壊れたのは可哀想ですけど
男2　たしかにね。青春やっちゃってるからね。青春スカシになっちゃうよね
女3　それはわかんないですけど
男2　青春スカしたら終わりよ、一番終わり
女3　まあ、それも自業自得と言うか

女1が扉から部屋に入ってくる。

女1　ねえ、エアコン直ったの？
男2　多分
女1　多分って。ちゃんと直してよ、ダラダラ喋っちゃって
男2　あのね、エアコン直すのなんて電気屋さんに言いなさいよ
女1　ああ、電気会社じゃなくて電気屋さんね
女3　え、やまもとさんって電気屋さんじゃないの？
男2　じゃないよ、なんだと思ってたの
女3　いや、エアコン直してるから電気屋さんだと思うでしょ、普通
男2　エアコン直してるから電気屋さんだとは限らないでしょ。引っ越し屋さんが洗濯機設置してくれてるの見て電気屋さんだと思わないでしょ
女3　そりゃ、引越しの時はね。洗濯機直してたら電気屋さんだと思うよ
女1　やまもとはね便利屋なんだよ
女3　あ、え、今時？
男2　逆にね。一周回ってね。今時なのよ、便利屋って
女3　そうかな
女1　なんでもやるよ
女3　なんでも？
男2　そうね。まあ、人間にできることなら基本的には
女3　すごい、私も頼んでいいですか？
男2　あれだよ、後方屈身3回宙返りとかは無理だよ
女3　頼みませんよ、そんなの
女1　こないだもなんか、おばあちゃんの代わりに海岸の掃除とかしてたんだから
女3　なんでもやるんですね

男2　そうそう、大抵のことはね
女1　それで、エアコン直ったの？
男2　見てみなさいよ

全員、エアコンを見る。水漏れが直っている。

男2　ほら
女3　たしかに、ポタポタしてないです
女1　やるじゃん
男2　言っておくけど、エアコン直すのとか大抵のことに含まれるギリギリだからね
女1　小さいこと言わないの。知らない人に長時間部屋居られるの嫌だったんだよ
男2　別にいいけどさ
女1　ありがとね
男2　うい。じゃあ、俺はこれで
女1　え
男2　何
女1　帰るの
男2　そりゃ帰るよ、見事にエアコン直しましたから
女1　スイカ食べる？
男2　スイカ？
女3　私、持ってきたんです今日
男2　ああ……どうしよっかな
女1　食べなよ
男2　え、ああ……
女1　ね
男2　……まあ、じゃあ先荷物片して来るから
女1　戻ってきてね
男2　はいはい

男2、脚立を持って出て行く。

女3　変わった人だね
女1　やまもと？
女3　あんな知り合いいたんだ
女1　うん、大学の友達
女3　変なクスリとかやってんじゃない？

女1　なにそれ

女1、ベッドに座る。

女3　良かったね
女1　何が？
女3　エアコン直って
女1　そうね
女3　……帰ってきたら？
女1　え
女3　実家
女1　いいよ
女3　でもさ
女1　エアコン直ったし
女3　いや、まあ、お姉ちゃんが嫌ならいいんだけど
女1　嫌じゃないよ
女3　じゃあ、どうして
女1　……“シドニーワラビードオリヨンジュウニピーシャーマン”
女3　でたそれ
女1　思い出せない？
女3　“シドニーワラビードオリヨンジュウニピーシャーマン”
女1　映画だよ
女3　ああ、ニモ！
女1　そうそう
女3　言ってた言ってた、あの青い方でしょ
女1　ドリーね
女3　そう、ドリー
女1　“シドニーワラビードオリヨンジュウニピーシャーマン”……なんか元気でるでしょ
女3　なんでよ
女1　魔法の言葉だから
女3　そんな話だっけ？
女1　覚えてる？一緒に映画館見に行ったの
女3　内容はね、もうほんとぼんやり。海で魚が喋ってディズニーってことぐらい
女1　小さかったもんね
女3　あの、あれだよね……オレンジの魚の子供が人間に攫われてさ
女1　そうそう

女3　で、なんかそのお父さんと友達の青い魚でその子を助けに行くっていう
女1　大体そう
女3　え、どこに出てきたっけ？“シドニーワラビードオリヨンジュウニピーシャーマン”
女1　それはさ、あれだよ。ニモが
女3　攫われた子ね
女1　そう、その子が連れてかれた場所がシドニーのワラビー通りの42のピーシャーマンっていう場所でさ
女3　そうだっけ？
女1　覚えてないの？途中で発覚するの。それを忘れないためにずっと口ずさんで、合言葉みたいに。“シドニーワラビードオリヨンジュウニピーシャーマン、シドニーワラビードオリヨンジュウニピーシャーマン”て、そこに行ったら息子を助けられるって
女3　そうだっけ
女1　そうだよ。え、全然覚えてないのね
女3　うん
女1　途中で、くじらがさ
女3　くじら？
女1　くじらに食べられてさ
女3　食べられるの？やばいじゃん
女1　くじらに食べられたと思ったらさ、そのくじらが運んでくれるの
女3　シドニーに？
女1　そうそう、クジラに伝えるのよお腹の中から。“シドニーワラビードオリヨンジュウニピーシャーマン”にどうぞよろしくって
女3　元々、どこに居たのよ
女1　知らない
女3　え、そこ重要なんじゃないの。元々、どこどこに居て、シドニーめっちゃ遠いけど頑張るみたいな
女1　いや、そうだよ。すごい距離移動してたよ、多分
女3　多分って
女1　そんな細かいことどうでもいいでしょ。あんたほとんど忘れてるんだから
女3　それとこれとは話が別でしょ
女1　私はね、そのくじらでね、
女3　あ！
女1　なに
女3　思い出した
女1　何を

女3　見終わった後にさ、フードコート行ったよね
女1　そうだっけ？
女3　そうそう。それで二人でアイス食べて
女1　サーティワン？
女3　サーティワン
女1　そうだっけ？
女3　食べたでしょ、チョコミントと大納言小豆
女1　ほんとに？
女3　それで、そのあと駄菓子屋さん行ってさ、一緒に遠足用のおやつ選んでくれて
女1　あー、なんとなく覚えてる。おやつは三百円以内って言ってるのにさ、いきなり百円のもの欲しいとかいうからさ
女3　別にいいじゃん
女1　三分の一だよ。全体の三分の一。もっと細かい十円とかのやつで攻めて行かないとさ、すぐいっぱいになっちゃうでしょ
女3　いいでしょ別に。先に欲しい物をドカンと手に入れないとさ
女1　それで、結局全然欲しいの買えなくて泣いてたでしょ
女3　そうだっけ？
女1　都合のいいことばっかり忘れちゃって
女3　いいでしょ、そうやって生きて行くんだよ人間は。忘れて、忘れて、たまにふと思い出すの
女1　まあ……そうね
女3　お姉ちゃんが、色々連れてってくれたよね
女1　まあ、二人とも忙しかったから
女3　ありがとね
女1　なにそれ
女3　感謝でしょ感謝

女3、ベッドにいる女1の隣に座る。

女3　……おっちゃんって誰？
女1　え
女3　さっき言ってたじゃん
女1　ああ……大学の友達
女3　やまもとさんと一緒？
女1　一緒っていうと語弊あるけど、まあそう……昔はね、ずっと一緒に遊んでて……あの時もそう……やまもととおっちゃんと三人で先輩の家遊びに行くってなって。やまもとが一人で飲み物持ってさ。パンパンのビニール袋

女3　フロスみたいになって
女1　そうそう、すごい痛そうなの手が。最初はこうやって（袋を手で持つ様子）普通に握って持ってたんだけどさ、限界がきて。今度は腕の内側で持とうとしてたんだけど、もうフロスの持ち手が腕に食い込んじゃってさ、もう腕パンパンって感じになって
女3　変わった人だね
女1　そしたらおっちゃんがさ、飲んじゃおうぜって
女3　飲む？遊びに行くんじゃないの？
女1　そうなんだけど。（おっちゃんが）そんなの持ってるから手がパンパンになるんでしょ、もう飲もうよ、お腹に入れちゃったら変わんないよって
女3　そうかな？
女1　そしたらやまもとも、俺もそう思ってたって言って、そこで飲み始めちゃって
女3　すごい話
女1　楽しかったなー……そのままおつまみとかも開けちゃってさ、ワイワイ喋って。そしたら、飲み物なくなっちゃったから買いに行こうって三人で買いに行ってね
女3　ええ
女1　すごい楽しかったのをね……さっきふと思い出した
女3　すごいタイミングだったよ
女1　そうね
女3　もう、刺激的すぎた
女1　ごめんね
女3　お姉ちゃんのせいじゃないから
女1　それもそうね

間

女1　（窓の外を見て）そろそろ帰ったら、もう遅いし
女3　そう？
女1　もう真っ暗でしょ
女3　……うん

女3、扉の方へ歩いていく。外に出て行こうとするかと思いきや、部屋の電気を消す。
暗くなる部屋。

女1　え、何

女3、女1の側に行く。

女3　……お姉ちゃん、大丈夫？
女1　どうして
女3　大丈夫そうに見えるから
女1　それなら大丈夫でしょ
女3　あんなことがあったら普通大丈夫じゃないよ、取り乱すよ
女1　取り乱してたよ
女3　全然……スンって感じだったよ
女1　そんなことないよ
女3　そんなことなくないよ
女1　そんなことないって

女3、女1に抱きつく。
電気を消した部屋は暗い。けれども、月の明かりが差し込んでいるから、真っ暗ではない。意外と明るい。

女1　何
女3　……。
女1　何してんの？
女3　……。
女1　なんかあった
女3　別に
女1　……振られた？
女3　……ほんとはさ、その話しに来たのに
女1　うん
女3　あんな修羅場の後だと、もうどうでもよくなっちゃった
女1　よかったよかった。結果オーライだ
女3　……帰っといでよ
女1　無理だよ
女3　どうして
女1　そういう距離なの
女3　なんの距離
女1　私と家族との
女3　……何それ

女3ベッドに寝転ぶ。続いて女1も隣に寝転ぶ。

女3　昔はよく川の字で寝てたよね
女1　布団でね
女3　そうそう
女1　お父さんのいびきがうるさくてね
女3　お姉ちゃんが言う？
女1　え？
女3　お姉ちゃんも相当うるさいけどね
女1　……そんなにうるさいかな
女3　うん、それだけは、まあそうねって、なっちゃった
女1　しょうがないでしょ、生まれつきなんだから。大人になったら治ると思ってたのに
女3　全然だったね
女1　遺伝だよ
女3　お父さんのいびき？
女1　そう
女3　お父さんもさすがに子供の頃はいびきかいてないんじゃない？
女1　聞いといてよ、今度
女3　うん、聞いとく
女1　……。
女3　じゃあ行くね

女3、ベッドから立ち上がる。

女1　うん
女3　ご飯食べなよ

女3、出て行く。

しばらくして、女1、絶叫。
遠くの方でドタドタ音がする。少しして男2が入って来る。

男2　なに？え、暗。どこ、どこ電気
女1　つけないで！
男2　……寝てんの？
女1　いいでしょ、別に
男2　まあ、いいけど。スイカは？

女1　あ
男2　あって……お前がスイカ食べろっていうから、戻ってきたんでしょ
女1　ごめんごめん、ちょっと待ってて

女1、部屋の外に。
男2、ちょっと待とうとするも、

男2　この部屋さ、机なくない？
女1（声）　何？
男2　机なくない？
女1（声）　当たり前でしょ、そいつが私の小指折ったんだから
男2　あ、ぶつけたのね
女1　（顔を出して）ほんと腹立つ。その日に捨ててやった
男2　お前がぶつけただけでしょ
女1　私がぶつけただけで私の小指が折れるって何よ。そんなことある？
男2　あるでしょ、普通に……っていうか折れてないんじゃないの？
女1　え
男2　足折れてないって言ってなかった。骨折に限りなく近い突き指
女1　折れてるか折れてないかは私が決めるの
男2　医者だろ
女1　だって、痛いんだもん今でも痛いよ、ずっと痛いもん。これは折れてる、折れてないと話にならない。会社にも折れてるって言ってやったもん
男2　どっちでもいいんだけど、机が可哀想だから。突き指だけで捨てられちゃったらたまんないよ
女1　うるさい

女1、また部屋の外に。
男2、一度は座ってみるも、なんか落ち着かない。
立ちあがって、窓から外を眺めてみる。夜だから暗いのだが、

男2　ここさ、海見えるんだね
女1（声）　ああ、まあ、一応ね
男2　いいね
女1（声）　夜だからそんな見えないでしょ、海なんて
男2　そんなことないよ、見えるよ
女1　どこ

と女1戻って来る。

男2　……スイカは？
女1　……持って帰りなよ
男2　は？
女1　めんどくさいんだよ、切って皿に盛ったりするの。切ったら残りもすぐ食べなきゃいけなくなるし
男2　お前が食えって言ったんでしょ
女1　だから、持って帰りなよ。お風呂で冷やして美味しく食べなさいよ
男2　食べるけどさ
女1　で、海が見えるって？
男2　あ？

女1、海の方を見る。

女1　あ、ほんとだ
男2　でしょ
女1　月の光が反射して
男2　キラキラしてるでしょ
女1　キラキラしてる
男2　でしょー
女1　知らなかった
男2　月って意外と明るいからね
女1　なんで知ってんの？
男2　なにが
女1　夜でも海が見えるって
男2　なんでってこともないけどさ……
女1　あれだ、ゴミ拾いだ
男2　夜に海は見れても、夜にゴミ拾いはきびしいぜ
女1　それは、たしかにそうね
男2　……ゴミ拾い終わってさ、押すなよ押すなよ見てさ、ぼーっと座ってたら気づけば夜でさ……前見ると月が出てて。水面の灯りが、ゆらゆらしてるの波で。そしたら、なんか地球って生きてるんだなーって
女1　なにそれ
男2　呼吸してるんだよ月の光浴びてさ、それが波なの。スーハースーハーって波がザザーンザザーンって

男2、窓を開ける。生暖かい夜の風が入り込む。干したばかりの洗濯物がゆらゆら揺れる。

男2　……ここだと聞こえないね波の音……死んでるみたい
女1　地球が？
男2　そう
女1　言っておくけど夜なのは日本だからだよ。地球には常に太陽の光が燦々だからね
男2　……聞こえないね。
女1　今日も行ってたの、海。ゴミ拾い
男2　ああ、今日は違う
女1　あ、そう。遅い時間しか無理って言ってたから
男2　今日はね、清掃だった
女1　海沿い？
男2　おばあちゃん家
女1　（前に）ゴミ拾い頼まれた？
男2　そう
女1　ほんとに、頼まれたらなんでもやるのね
男2　おばあちゃん、死んじゃった
女1　え
男2　うん
女1　……急だね
男2　そう……かな
女1　え
男2　いや、まあ急っちゃ急なんだけど……なんとなくそんな感じもしてたんだよね。膝壊しちゃってからさ、どこにも行けてないみたいだったし。一日一回外に出てゴミを拾ってたのがなくなってさ。なんか元気なくなってってた感じ結構してたし。この前、そのおばあちゃんの娘さんから電話かかってきてさ……おばあちゃんが死ぬ前に言ってたんだって、もし私が死んだら最近ひいきにしている便利屋があるからその人に頼みなさいって。娘さんも思ったって、今時便利屋ってなんだよって。でも、まあ、実際遺品整理とか、部屋の片付けとか、人一人の人生の膨大な量を整理しないといけないからさ。そして、その大半は捨てないといけないから、他人がやった方が案外スムーズなわけ……最後、片付けてたらおかしの箱の中にさ、綺麗な貝殻がたくさん入ってるの見つけてさ、あ、おばあちゃんは毎日海に貝殻を拾いに行ってたんだ、それのついでにゴミ拾い始めたんだって思って……生きてる間はわからなかったのに死んだらすぐわかったよ、毎日ゴミ拾いしてた理由
女1　……。

男2　なんで今更連絡してきたの？
女1　……。
男2　もう何年も連絡取って無かったのに
女1　……。
男2　エアコンの修理なんか電気屋に頼めばいいじゃん
女1　……体重計買ったよ
男2　え
女1　年齢測ってくれるやつ……なんか最近1、2歳だけ体が若いってさ。でも心の方がもっとずっと若いよ。今日とか凄い若くなってた気がする……まさか、人生でこんな夜を過ごすことになるとは、夢のようだったよね、悪い意味で……さびしくないよね
男2　何それ
女1　……引きこもるようになってからさ、意外と私ってちゃんと生きてたんだみたいな。年取って来てたんだみたいなことを凄い感じてさ。ずーっとまだなんとなく若いと思ってたんだけど。色んな人から連絡来たり、急に部屋に人が来ることになったり。こう言う時に家の物少なくて良かったって思ったよね。なのにエアコン壊れてさ。ぜっかく人が来るのにジメジメかよみたいな。……最近、おっちゃんの事、すごい思い出すの
男2　だろうね
女1　何それ
男2　お前から連絡来た時からあいつの話がしたいんだろうなって思ってた
女1　そう
男2　お前、全然喋んないし
女1　……うん
男1　おばあちゃん死んじゃって、やっぱり思い出したよね
女1　お葬式あった？
男1　そりゃあありますよ、普通は
女1　おっちゃんのお葬式行きたかったよね
男1　まあ……でも、あの頃は集まれなかったし
女1　うん……まだ、ぼんやりしてるんだよね。お通夜も葬式も行けなかったし、急にお墓参りってなってもさ、この下に骨になって埋まってますって言われてもピンとこないっていうか。直後とかはさ、まあこんなもんなのかなとか思ってたの。身近な人死んじゃうの初めてだったから。しばらく会わなくなるだけか、みたいな……他の人とも疎遠になっちゃったから、なんか延長線上にあるというか。でもさ、最近になってちゃんと年取ってるんだって思った瞬間にさ、ああやっぱり一緒に歳とってないんだなって思い出すんだよね……頭の中にいるのはさ、あの頃のおっちゃんだから。やまもとも髭つなぎになってるのに、おっちゃんは変わってないし、おっちゃ

んはずっと若いままだから、私も若いままだったら良かったのに……なんかやっぱり歳取っちゃうみたいだし、体も心も。……こないだね、小指ぶつけて一番痛い時なんだけど、その時はああ会社いかなきゃって思ってさ、頑張って向かおうとしてたわけ。駅までの道に結構な階段があってね、その階段の真ん中くらいに百円で買える自販機があってさ、お水買おうと思って財布から百円出したの。でも、落としちゃってさ、それが階段の下の方にコロコロ転がってちゃって、そんなの無視したら良かったんだけど、なんかムキになって階段の下まで追いかけてやったの百円を、足もの凄い痛いのに！でも、その百円……結局転がってる途中で排水溝に落ちちゃって……なんかね、その時にああ、いいやって思ったの。もういいやって……龍池くんとカヨちゃんが浮気してるのも、小指が痛いのも、最近おっちゃんのこと思い出すのも、エアコンが壊れて、部屋がジメジメして、洗濯物がさ、なんか生乾きな気がするのも……なんか、もういいかなって思っちゃって……

男2　そう

女1、ベッドに寝転ぶ。

女1　……今日は楽しかったな

男2　俺は殴られそうになったけど

女1　あ、そうね

男2　……これからどうするの

女1　……わかんない

男2　便利屋やりたくなったらいつでも言って

女1　今日泊まってくでしょ

男2　なんでだよ。どこで寝んのよ

女1　地べた

男2　嫌だよ

女1　私、いびきうるさいらしいから、寝れなかったらごめんね

男2　知ってるよ

女1　え、なんで

男2　あいつが教えてくれた。ユリちゃんはいびきうるさいんだよ、でも生まれつきらしいからいじったらダメだよって

女1　……おっちゃんか

間

女1　明日帰るときさ

男2　すぐ帰るけどね

女1　冷蔵庫の中身持って帰っていいよ
男2　なんで
女1　食べないから
男2　スイカ以外も？
女1　うん
男2　……食べなきゃ死ぬよ
女1　……“シドニーワラビードオリヨンジュウニピーシャーマン”……“シドニーワラビードオリヨンジュウニピーシャーマン”……このまま寝てたらさ、どっか着いてないかな
男2　どっかってどこ
女1　海の向こう？
男2　海外ね
女1　……モン・サン・ミッシェルとか
男2　どこそれ
女1　教えない。私一人で行くから
男2　でも、そんなこと言ってたらシドニーに着いちゃうでしょ
女1　じゃあ、モン・サン・ミッシェル……モン・サン・ミッシェル……
男2　俺も行きたいな
女1　ダメです

男2、扉を閉めて、床に寝転ぶ。ゆらゆらしていた洗濯物が次第に動かなくなっていく。

少しして、女1、なにかに気づく。

女1　ねえ……ポタポタいってない？
男2　いや、エアコン直ったから。直したから俺が
女1　いや、まあそうなんだけど
男2　明日見るよ
女1　寝てく気じゃん
男2　お前が言ったんでしょ
女1　……逆にさ、ポタポタしてって、いっぱいになったらいいのにね
男2　逆に？
女1　部屋がさ、漏れ出た水でいっぱいになって……洗濯物なんかも、もはや全部濡れちゃってどうでもよくなって……水の中……水の底、水の一番底のベッドで寝てさ……フワフワしながら寝てさ……逆にどこにも行かないの……ずーっと底で寝続けて……寝続けて……寝続けたらさ

男2　なに
女1　……覚えといてよ、私のいびき
男2　いびきをかかない努力をして欲しいけどね
女1　……おやすみ
男2　……おやすみ

窓の外、夜はまだ深まっていく。深く、深く、

（幕）

【セリフの引用元】
アンドリュー・スタントン（監督・原案・脚本）、佐藤恵子（吹替翻訳）、稲田嵯裕里（字幕翻訳）、『ファインディング・ニモ』（原題：*Finding Nemo*）、Walt Disney Studios Motion Pictures、2003